

令和6年度病害虫発生予察情報 発生予報第3号

令和6年6月26日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	天候予報(6月20日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(±)。	発生の早期発見、早期防除に努める。特に多肥田では発生しやすいため、注意する。 置苗は、葉いもちの発生源となるため、水田内に放置せず適切に処分する。
	紋枯病	全 域	平年並	平年並	昨年の発生は少なかった(-)。天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている(+)	窒素肥料の多用をさける。 薬剤散布は、穂ばらみ期に実施する。 気温が高いと上位葉鞘への伸展が早まるため、注意する。
	斑点米 カメムシ類	全 域	—	やや多い	6月中下旬の畦畔での発生地点割合は平年より高かった(+)。天候予報によると、向こう1か月の気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(±)。	畦畔や水田周辺のイネ科雑草の穂は斑点米カメムシ類の増殖源になるため、草刈りを励行し、イネの出穂10日前までに終了させる。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

水 稲	<p>■イネドロオイムシ 同系統の育苗箱施用剤を連用すると防除効果が低下します。育苗箱施用剤を使用している場合、次年度の薬剤の変更を検討してください。</p>
-----	--

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全 域	—	平年並	6月中旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	
	褐斑病	全 域	—	やや多い	6月中旬の発生ほ場割合は、新梢葉及び果そう葉ともに平年よりやや高かった(+)	梅雨期は二次感染を繰り返す恐れがあるため、発生が認められる園地では防除対策を徹底する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する(令和6年6月29日付け令和6年度病害虫防除情報(リンゴ褐斑病)参照)。

リンゴ	黒星病	全域	—	平年並	6月中旬の新梢葉及び果実での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	6月中旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	
	アブラムシ類	全域	—	やや少ない	6月中旬の新梢寄生の発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	6月中旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
モモ	灰星病	中通り	—	やや多い	6月中旬の発生ほ場割合は、平年並(±)であったが、本年は花腐れの発生が多かったため、本病菌の密度が高まっている(+) 。	現在早生種の重要防除期であるので、灰星病防除剤を散布する。本年は花腐れの発生が多かったため、降雨前の予防散布を徹底する。
	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	6月中旬の新梢葉の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	梅雨期は発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要である。 薬剤防除は、10日間隔でせん孔細菌病防除剤を使用する。その際、早生種は収穫前日数に十分注意する。 罹病部位は見つけしだい除去し、発生拡大が懸念される場合は速やかに袋かけを行う。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	6月中旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。
	アブラムシ類	中通り	—	平年並	6月中旬の新梢寄生は、確認されなかった(±)。	
	ハダニ類	中通り	—	平年並	6月中旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。

ナシ	黒星病	全 域	—	やや多い	6月中旬の発生ほ場割合は、新梢葉では平年より高く、果実では平年よりやや高かった（+）。	本病に対する「幸水」果実の感受性は満開後50～90日頃に高まり、梅雨期と重なるため、今後の感染拡大が懸念される。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する（令和6年6月20日付け令和6年度病害虫防除情報（ナシ黒星病）参照）。
	アブラムシ類	全 域	—	やや少ない	6月中旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや低かった（-）。	
	ハダニ類	全 域	—	平年並	6月中旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった（±）。	要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	全 域	—	やや多い	6月中旬のナシ果実被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かった（+）。6月のフェロモントラップの誘殺数が8地点中5地点で平年より多い（6月24日現在）。	フェロモントラップへの誘殺が続いている地点があるので、園地を観察し多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行う（令和6年6月6日付け令和6年度病害虫防除情報（果樹カメムシ類）参照）。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ・モモ・ナシ等	<p>■ナシヒメシクイ</p> <p>本種の第2世代以降はナシなどの果実に移行します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底してください。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守してください。</p>
ブドウ	<p>■晩腐病</p> <p>幼果期の防除終了後速やかにカサ掛けを行ってください。カサは雨もりを防ぐように丁寧に行いましょう。また袋かけ前の防除終了後は、速やかに袋掛けを行いましょう。</p>
リンゴ等	<p>■オオタバコガ</p> <p>福島市のリンゴで本種による果実被害を確認しました。野菜・花きで発生が多く、フェロモントラップでの誘殺数が多くなっているため、今後の発生動向に注意してください。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。

夏秋トマト（被覆栽培）	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆するように努める。
	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全域	—	平年並	巡回調査における発生は確認されなかった（－）が、天候予報（仙台管区気象台6月20日発表）によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（＋）。	ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全域	—	平年並	巡回調査における発生は確認されなかった（－）が、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（＋）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、加湿防止、資材の消毒に努める。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、巡回調査では一部多発生のほ場が確認されている。また、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（＋）。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。

キク（露地栽培）	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（+）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（+）。	低密度時から防除を実施する。薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（-）。	中位葉以上での発生に注意し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去7年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	-	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高く、巡回調査では上位葉への発病も確認されている（+）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年よりやや低かった（-）が、天候予報によると、向こう1か月の期間は、気温が高くなると予測されている（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	やや早い	例年並	発生ほ場割合は例年並（±）であったが、芯折れ等の被害が例年よりやや早く確認されている（+）。	ほ場をよく観察し、防除を徹底する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	早い	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、フェロモントラップのデータによると、平年に比べて誘殺時期が早まっており、今後誘殺数がやや多くなると予想されている（+）。	生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■アザミウマ類</p> <p>アザミウマ類による葉や花への寄生が、例年多く確認されています。春から秋にかけて周辺の雑草地等で増殖し、常時成虫の飛び込みがあること、生育過程で植物組織中の卵や土中の蛹など薬剤がかかりにくいステージがあることから薬剤のみの防除では十分な効果が得られない場合があります。耕種的防除、物理的防除等も取り入れた総合的な防除を行う必要があります。アザミウマ類の果実被害では、大玉トマトでは果実に白ぶくれ症状を起し、ミニトマトでは、金粉症状を起す等、商品価値を大きく失います。ミカンキイロアザミウマは、TSWV等のウイルスを媒介するため注意が必要です。</p>
-------------	---

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで令和6年度農薬危害防止運動を実施します◆
農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。